

先導する「崑崙奴」の図像的役割について—敦煌維摩經變相図の世俗人物群像を中心に

平 法子

本発表は、敦煌莫高窟の維摩經變相図において、維摩居士と文殊菩薩の法論の様子を描く『維摩經』「文殊師利問疾品」の場面下部に配された世俗人物群像のうち、その先頭に少し小さめサイズで表された、「崑崙奴」の図像的役割について考察するものである。崑崙奴とは、「崑崙」と総称される林邑以南の国々の民族で、特に中国で奴隷として使役されていたものをいう。その身体的特徴は、巻き髪で肌の色が黒く、上半身は条帛のみ左肩から斜めに掛け、下半身は短裙と腰巻を着け、耳環、腕釧・足釧等の装飾品で身を飾っている。

世俗人物群像に崑崙奴を配した維摩經變相図は、敦煌莫高窟の初唐期の壁画に登場し、維摩下方の異民族群像の先頭に表されていたが、中唐期以降は文殊下方の漢民族群像の先頭にも表されるようになった。これらは先行研究により、『維摩經』「方便品」中の「國王・大臣・長者・居士・婆羅門等、及諸王子、并餘官屬、無數千人皆往問疾」の情景を表したもので、経文の「國王…及諸王子」という箇所が、講経文で「諸國王、兼國王子」と講釈された結果、異国の王や漢民族の皇帝を登場させる要因になったとされている。しかし経典類には、具体的にどの国の王や王子が登場するかは記されておらず、崑崙奴の存在も見出せない。ところが維摩經變相図には、崑崙奴が描かれる場合が多く、しかもそれが世俗人物群像の先頭に表されていることは注目に値する。

維摩經變相図には、今回取り上げる群像の先頭の崑崙奴のほか、異民族群像の中に侍者を伴った「崑崙王」も表されている。維摩經變相図中の崑崙奴については、淺湫毅氏も鬼形の源流を探る研究の中で、その関連作例として注目しておられるが、崑崙王と崑崙奴とを図像上では明確に区別しておられない。またこれまでの研究では、崑崙奴が群像の先頭にいる意味や役割にまで踏み込んだ議論はなれてこなかった。しかし、異民族群像と漢民族群像の先頭に崑崙奴を配する作例が、晩唐から五代に至るまで描き続けられていることを鑑みれば、当時の社会において、世俗人物群像の先頭には崑崙奴を描くものだとする認識が存在していたのではないかと考えられる。

そこで本発表では、敦煌莫高窟の維摩經變相図の中の、世俗人物群像の先頭に表される崑崙奴に着目し、当該図像が群像の「先導者」としての役割を担っていたことを指摘したい。研究手法としては、まず世俗人物群像の形式的変遷を整理し、そのうえで、崑崙人のうち、崑崙奴や崑崙王などの図像的特徴を確認する。続いて、騎獅文殊図や騎象普賢図など、維摩經變相図以外の作例においても崑崙奴が描かれていることに着目し、その先導者としての役割を検討する。最後に、崑崙奴は香炉あるいは山形供物を捧げ持つが、これらがいずれも「香」に関わる持物とみられることに着目し、崑崙奴と香供養との関連性を当時の仏教儀礼に関する記述などから明らかにしたい。